

琉球大学学術リポジトリ

幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 志麻, kinnjou, Shima, kinjou, Shima メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/32926 |

幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連

金城志麻

Relation of Mothers' Emotional Availability and Parenting Self-Efficacy:
Hocus on the Pre-School Children.

Shima kinnjou

1. はじめに

近年、児童虐待の件数はこの20年間で50倍以上に膨れ上がり、増加の一步をたどっている。厚生労働省（2011）の調査によると、平成22年度における全国の児童相談所が対応した児童虐待の件数は初めて5万件を突破した。このような社会情勢をうけて、臨床心理学的支援の領域でも、子育てを行う養育者（以下、母親）に対する“子育て支援”は盛んに行われている。虐待という、母親、子どもの双方にとって悲劇的な関わりを生じさせないためにも、母親が子育てを行う際の原動力となる要因を臨床心理学的知見から検討することは急務と言えよう。実際の臨床現場では、子どもとの向き合い方に戸惑う母親に出会うことが多い。そのような母親にとっての子育ては、困難感というネガティブな感情の生起の割合が子育ての楽しさよりも高くなるのである。一方、母親が子どもと真剣に向き合うことで、上手いいかないつらさや成長を感じられる喜び等の喜怒哀楽といった様々な感情を母親は経験すると考えられる。つまり、子育てを行う上で様々な感情をバランスよく経験することが重要と考えられる。

2. 母親の子どもに対する認知のありかた

このような、母親と子どもとの相互交渉の営みの中で、母親が子どもの内的状態の読み取りに着目した研究が盛んに行われている。母子相互作用の中で母親の情緒的安定に関連があるとされている要因の一つに情緒応答性があげられる。情緒応

答性とは、「母子相互作用における、乳児の情緒表現への気づきと共感的な反応、及び母親の情緒表現の提供という一連の応答能力」である（Emde&Sorice 1983/1988）。小原（2005）は、母親が子どもの感情をどう読み取るかという側面は情緒応答性の一側面とし、IFEEL Pictures（以下、IEP）を用いて情緒応答性と母親の育児困難感との関連について検討を行った。IEPとは、母親が乳幼児の感情をどのように読み取るかを通して母親の情緒応答性を具体的、経験的に把握するために開発されたツールである（Emde, Osofsky, & Butterfield, 1993）。その結果、「快・不快のあいまいな写真」に対して快感情を多く読み取るほど育児困難感が高いことを示した。一般的には子どもの不快感情を多く読み取る母親の方が、快感情を多く読み取る母親より育児困難感が高いと予想されるが、小原（2005）の結果はそれを翻すものであった。この点について小原（2005）は、育児を困難と感じている母親ほど、子どもがぐずりや泣きといった不快感情は試行錯誤的な関わりを必要とされるため子どもの不快感情の読み取りを回避している可能性を指摘した。さらに、不快感情の読み取りを回避した結果、子どもの不快感情に基づく行動がさらに表出され、より育児困難感を高くする可能性を考察した。

これまでの育児研究の中では、虐待等の防止という観点から研究が行われているものが多く、育児ストレスや育児困難感といった子育てで感じるネガティブな感情面を引き起こす要因について多く検討されている。一方、育児を支える要因の一つとして育児自己効力感という概念が提唱されて

いる。育児自己効力感とは、「親としての能力に対するどのくらい有能かつ効果的にふるまうことができるかという程度に対する親の期待」である (Teri & Gelfand, 1991)。田坂 (2003) は、幼児期の子どもの持つ母親の育児自己効力感を測定する尺度を作成し、「子どもへの積極的関わりへの自信」「子どもを安堵させる自信」「子どもを自己統制させる自信」の3因子を見いだした。当たり前の事実として子育てに困難はつきものであると言えよう。そのため、育児ストレスや育児困難感といった子育てで感じるネガティブな感情面を低減させる要因を明らかにすることも重要だが、育児自己効力感のように子育ての原動力となる要因を探る視点も必要であると考えられる。

3. 本研究の目的

そこで、本研究では母親の育児自己効力感に着目し、母親が子どもの感情面に対する情緒応答性という視点から育児効力感の関連を検討することを目的とする。具体的には、①母親が子どもの快・不快感情への読み取りという視点、②母親が子どもの快・不快感情に対する読み取りの強さという視点から、情緒応答性と育児効力感の関連性について検討することを目的とする。

方法

1. 研究参加者

A市にある子育て支援センターに通っている就学期前(2歳～5歳)の定型発達児の母親22名(平均年齢36.7歳、標準偏差5.73)であった。なお、同子育て支援センターにて、研究の目的、内容について説明し、承諾が得られた方を研究参加者とした。

2. 調査期間

2010年12月上旬から2011年1月上旬にかけて調査を実施した。

3. 材料

以下の2つの材料を用いて分析を行った。

①日本版IFEEL Pictures

日本版IFEEL Picturesは、生後12カ月の日本人乳幼児の表情写真30枚から構成されている。30

枚の写真はブック形式になっており、家庭における日常的な雰囲気の中で撮影された様々な表情から構成されている。アメリカ人の乳幼児写真では親近性が薄く実感のこもった反応が得られないことが明らかになり、生後12カ月の日本人乳幼児写真を用いて日本版IFEEL Picturesが作成されることになった(井上ほか, 1990)。

その際、井上らは、IFEEL Picturesと日本版IFEEL Picturesが同様に心理的側面を測定していることに加え、再検査信頼性および自己評価式抑うつ尺度(Self-Rating Depression Scale: SDS)との併存的妥当性を確認している。また、反応分類に使用する情緒カテゴリーについても、アメリカ版では13カテゴリー(Surprise, Interest, Joy, Content, Passive, Sad, Cautions-Shy, Shame-Guilt, Disgust-Dislike, Anger, Distress, Fear, Other)に加えて‘甘え(対象希求)’や‘自己主張’の項目を加えた新しい日本版IFEEL Picturesが作成された(井上ほか, 1990)。

②育児効力感質問紙

育児効力感質問紙は、「子どもへの積極的関わりへの自信」「子どもを安堵させる自信」「子どもを自己統制させる自信」の3因子から構成されている。また、育児を一つの領域とみなしてその領域における自己効力感を測定するParental Self-Agency Measure (PSAM: Dumka et al., 1996)との妥当性、信頼性が確認されている(田坂, 2003)。育児効力感質問紙への回答は、7件法によるものである。質問項目はTable.1に示した。

4. 手続き

日本版IFEEL Picturesおよび育児効力感質問紙を用いて、30分程度の個別調査を行った。なお調査は、子育て支援センターの一室で子ども同室で行われた。

①調査の実施

日本版IFEEL Picturesの施行の際には、写真を1枚ずつ母親に呈示して、乳幼児の感情を尋ねた。「ここに赤ちゃんの表情を撮った写真が30枚あります。この写真の赤ちゃんが表している、一番強くてはつきりしている感情、情緒はどんなものでしょうか。心に最初に浮かんだ言葉をそのままできるだけ1つの単語で答えてください。回答に正しいとか間

Table.1 育児自己効力感因子項目

| |
|---|
| 第1因子 子どもへの積極的関わりの自信 |
| 1. 子どもとしっかり遊んだり、あるいは話をすることで、子どもの気持ちを満足させている |
| 3. 子どもはあなたのことをよく遊んでくれる遊び相手あるいはよき理解者であるとおもっている |
| 6. 子どもにあったいろいろな遊び方で関わっている |
| 9. 子どもがまねをできるようなよいお手本を見せている |
| 11. 忙しい時でも子どもと関わることができる |
| 14. 子どもの行動や表情には敏感に反応している |
| 第2因子 子どもを安堵させる自信 |
| 2. 子どもが自信がつくようによいところは褒めている |
| 5. 子どもがぐずった時、あるいは言う事を聞かない時に、なだめている |
| 7. 子どもが不安そうにしているとき、言葉をかけて安心させている |
| 10. 子どもが機嫌の悪い時には落ち着いて話をすることが難しい (R) |
| 13. 子どもが泣きだした時、私に関わることで泣きやむ |
| 第3因子 子どもに自己統制させる自信 |
| 4. 子どもに我慢させるべきことは我慢させられる |
| 8. 子どもがどうしても言う事を聞かない時には、子どもの要求通りにしてしまう (R) |
| 12. 子どもが聞き分けのない時には、何を言っても無駄だと思う (R) |

Rは逆転項目を表す

違っているというのではありませんから気楽にやってみてください。」と教示し、自由に回答してもらった(表情カテゴリー)。

その後、同じ30枚の写真について、それぞれの赤ちゃんが表している感情や情緒が、どのくらい快か不快かについて、非常に不快～非常に快を5件法で回答を求めた(情緒応答性)。さらに、育児効力感質問紙の回答を求めた(育児自己効力感)。

②表情カテゴリーの分類

平野ほか(1997)による、日本版IFEEL Picturesのカテゴリー化にしたがって、母親による自由回答を評定、分類した。本研究での回答者の評定、分類については、日本版IFEEL Picturesの実施マニュアルに基づいて行った。日本版IFEEL Picturesのカテゴリーの定義および、カテゴリー例をTable.2に示した。

Table.2 日本版IFEEL Picturesに対する回答における感情別カテゴリー分類表

| カテゴリー | カテゴリーの定義 | カテゴリー例 |
|----------|----------------------|-----------------|
| 喜び | 喜び, 安心, 満足等の快感情 | おいしい, おもしろい, 満足 |
| 恥 | 照れ, 恥じらい, はにかみ等の感情 | 恥ずかしい, うふふ |
| 疲れ | 疲れ, 退屈, 失望, まどの感情 | 飽きた, がっかり, 憂うつ |
| 思考 | 思考, 空想, もの思い等の感情 | 考えている, もの思い |
| 怒り | 怒りの感情 | いや, いらいら, 拒否 |
| 悲哀 | 悲しさ, 寂しさ, みじまさ等の感情 | 孤独, しょんぼり, 疎外感 |
| 眠い | 眠気に関する物 | あくび, ぐっすり, 眠い |
| 不安 | 不安, 緊張, 心配等の感情 | 心細い, 困惑, ためらう |
| 不満 | 不満, いじけ, すねる等の感情 | おもしろくない, ぐずる |
| 自己主張 | 自己主張, 意志, 意欲等の気持 | 一生懸命, おすまし, 決意 |
| 恐怖 | 恐れ, 恐怖等の感情 | 怖い, おびえる |
| 注意・疑問・驚き | 注目, 疑問, 驚き等の状態 | 感心, じっと見ている, 夢中 |
| 対象希求 | 特定の人を求める, 甘えなどの感情 | 愛情, だっこして, 待つ |
| 苦痛 | 苦痛などの身体的, 生理的な不快感情 | 痛い, 気持ち悪い, 不快 |
| 欲求 | 欲求, 切望等の物質を求める気持ち | 欲しい, 何かちょうだい |
| 嫉妬 | 嫉妬, ねたみ, うらみ等の感情 | いいなあ, うらやましい |
| 我慢 | 我慢, 忍耐等の感情 | 耐える, 歯を食いしばる |
| その他 | 上記カテゴリーに該当しない感情, 無感情 | しらける, 見下す, 軽蔑 |
| 回答拒否 | 回答を拒否したもの | |

結果

1. 表情写真の分類

平野ほか(1997)は、日本版IFEEL Picturesによる乳児の写真は、伝達される感情・情緒が明瞭な物と、さまざまな感情がブレンドされた、あいまいな物に分類され、回答者独自の反応は、あいまいな写真に表れやすいことを示唆しており、伝達される情緒の特徴別に30枚の写真进行分类している。本研究では、母親による感情の読み取りの特徴を持つ意味を明確にするために、平野ほか(1997)の分類を基本として、「快な写真(p1, 4, 7, 21, 22, 24, 27)」、「不快な写真(p2, 11, 16, 17, 19, 28, 29)」、「快・不快のあいまいな写真(p3, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 18, 20, 23, 25, 26, 30, 以下あいまいな写真)」の3種類に30枚の写真进行分类し、分析を行うこととした。

「快な写真」「不快な写真」「あいまいな写真」について、どのくらい快か不快かについて、非常に不快～非常に快を5件法で回答を求め、情緒応答性得点とした。

「快写真」の情緒応答性得点平均値は4.16、標準偏差0.35、「不快写真」の情緒応答性得点平均値は1.94、標準偏差は0.30、「あいまいな写真」の情緒応答性得点平均値は2.96、標準偏差は0.27であった (Table. 3)。各写真に対する情緒応答性得点平均値について、t検定を行ったところ、それぞれ

に有意な差があり、写真の分類は適当であったと言える(快・不快： $t(21)=2.08, p<.01$, 快・あいまい： $t(21)=2.08, p<.01$, 不快・あいまい： $t(21)=2.08, p<.01$)。

2. 「あいまいな写真」に対する反応と育児効力感の関連

①「あいまいな写真」に対する表情カテゴリー反応と育児効力感の関連

赤ちゃんの表情が快か不快かあいまいな写真に対して、どのような表情であると読み取ることが育児効力感と関連するのかを検討するため、回答された表情カテゴリーの反応数を説明変数とし、育児効力感及び育児効力感の各因子を目的変数とする重回帰分析を行った。その際、表情カテゴリーは、反応数の最大値が2以下のものは分析の対象から除いた8項目とした (Table.4)。

また、育児効力感の各因子について、「子どもへの積極的関わりへの自信」平均値は28.77、標準偏差は4.50、「子どもを安堵させる自信」平均値は25.14、標準偏差は3.54、「子どもを自己統制させる自信」平均値は13.27、標準偏差は2.80、育児効力感全体の平均値は67.18、標準偏差は7.76であった (Table.5)。

重回帰分析の結果、表情カテゴリー「思考」において、「子どもを安堵させる自信」に関する育児効力感と正の有意な関連がある傾向が見られた($\beta =.506, p<.10, Table.6$)。

Table. 3 各写真における情緒応答性得点平均値・標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|--------|------|------|
| 快写真 | 4.16 | 0.35 |
| 不快写真 | 1.94 | 0.3 |
| あいまい写真 | 2.96 | 0.27 |

Table.4. あいまいな写真における表情カテゴリー反応数

| 表情 | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 |
|-----------|-----|-----|------|------|
| 喜び | 0 | 3 | 1.15 | 0.96 |
| 疲れ | 0 | 3 | 0.37 | 0.83 |
| 思考 | 0 | 3 | 0.37 | 0.76 |
| 眠い | 1 | 6 | 2.74 | 1.24 |
| 不満 | 0 | 5 | 1.79 | 1.58 |
| 注意 | 2 | 11 | 5.16 | 2.24 |
| 欲求 | 0 | 4 | 1.00 | 1.11 |
| その他 (無表情) | 0 | 3 | 0.79 | 0.92 |

その他の回答された各表情カテゴリーは、「子どもへの積極的関わりの自信」(Table.7)、「子どもに自己統制させる自信」(Table.8)に育児効力感全体(Table.9)に有意な関連は見られなかった。

そこで、より詳細に母親の認知のあり方による育児効力感との関連を検討するため、分析1では、

母親の快・不快感情への読み取りという視点から情緒応答性快群・不快群に分類し、分析2では母親の子どもへの快・不快感情に対する読み取りの強さという視点から情緒応答性高群・低群に分類し、それぞれの群と育児効力感の関連について分析を行った。

Table.5 育児効力感得点の平均値・標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|----------------|-------|------|
| 育児効力感 | 67.18 | 7.76 |
| 子どもへの積極的関わりの自信 | 28.78 | 4.50 |
| 子ども安堵させる自信 | 25.14 | 3.54 |
| 子どもを自己統制させる自信 | 13.27 | 2.80 |

Table.6 表情カテゴリーと「子どもを安堵させる自信」に関する育児効力感

| | β (ベータ) | 有効確立 |
|-----------|---------------|--------|
| 喜び | .241 | .515 |
| 疲れ | .314 | .336 |
| 思考 | .506 | .079 † |
| 眠い | .230 | .521 |
| 不満 | -.301 | .366 |
| 注意 | -.330 | .353 |
| 欲求 | .420 | .207 |
| その他 (無表情) | .088 | .736 |

Table.7 表情カテゴリーと「子どもへの積極的関わりの自信」に関する育児効力感

| | β (ベータ) | 有効確立 |
|-----------|---------------|------|
| 喜び | .347 | .436 |
| 疲れ | .306 | .432 |
| 思考 | .400 | .231 |
| 眠い | .245 | .568 |
| 不満 | .278 | .484 |
| 注意 | .073 | .862 |
| 欲求 | .204 | .598 |
| その他 (無表情) | -.112 | .719 |

Table.8 表情カテゴリーと「子どもを自己統制させる自信」に関する育児効力感

| | β (ベータ) | 有効確立 |
|-----------|---------------|------|
| 喜び | -.278 | .473 |
| 疲れ | -.329 | .336 |
| 思考 | -.448 | .130 |
| 眠い | -.441 | .148 |
| 不満 | -.268 | .439 |
| 注意 | .137 | .707 |
| 欲求 | -.425 | .221 |
| その他 (無表情) | .328 | .241 |

Table.9 表情カテゴリーと育児効力感(全体)

| | β (ベータ) | 有効確立 |
|-----------|---------------|------|
| 喜び | .211 | .642 |
| 疲れ | .202 | .610 |
| 思考 | .301 | .374 |
| 眠い | .088 | .841 |
| 不満 | -.073 | .857 |
| 注意 | -.058 | .892 |
| 欲求 | .157 | .693 |
| その他 (無表情) | .093 | .771 |

3. 「あいまいな写真」に対する快・不快への読み取りにおける情緒応答性と育児効力感の関連性 - 快群・不快群 - (分析 1)

①. 「あいまいな写真」に対する情緒応答性得点による群分け

「あいまいな写真」に対して情緒応答性得点が平均値よりも高かった10名を、あいまいな写真を快の表情であると読み取りやすい群とし、情緒応答性「快群」とする。同時に、情緒応答性得点が平均値よりも低かった9名を、あいまいな写真を不

快の表情であると読み取りやすい群とし、情緒応答性「不快群」とする。平均値は47.32であったため、情緒応答性得点が47得点台の3名は分析から除いた。快群の情緒応答性得点平均値は50.80、標準偏差は3.19、不快群の情緒応答性得点平均値は43.56、標準偏差は2.30であった(Table. 10)。t検定によって、2つの群の情緒応答性得点を比較したところ有意な差が見られたため、群分けは適当であると言える($t(16)=2.12, p<.01$)。

Table. 10.情緒応答性快群および不快群の情緒応答性得点

| | 平均値 | 標準偏差 |
|-----|-------|------|
| 快群 | 50.80 | 3.19 |
| 不快群 | 43.56 | 2.30 |

②.情緒応答性快群・不快群の表情カテゴリーについて

各群において、快あるいは不快な表情の中でも特にどの表情を読み取る傾向が高いかを明らかにするため、クラスカル・ウォリスの検定を行った。その結果、不満、その他、注意の項目で、群による表情読み取り数に違いがある傾向が示唆された。不快群は快群よりも不満、その他(無表情)の表情を読み取る傾向が高く(不満： $p<.10, Fig.1$)、その他： $p<.10, Fig.2$)、快群は不快群よりも注意の表情を読み取る傾向が高い($p<.10, Fig.3$)ことが示唆

された。

③.情緒応答性快群・不快群の育児効力感について

各群における育児効力感について、育児効力感全体および各因子得点の比較をt検定を用いて行ったところ、情緒応答性快群および不快群のすべての育児効力感および各因子の得点に有意な差はみられなかった。このことから、「あいまいな写真」を快表情と捉えやすいか、不快表情と捉えやすいかということは育児効力感に影響を与えないことが示唆された。

Fig.1 情緒応答性快群および不快群における「不満」表情カテゴリーの反応数

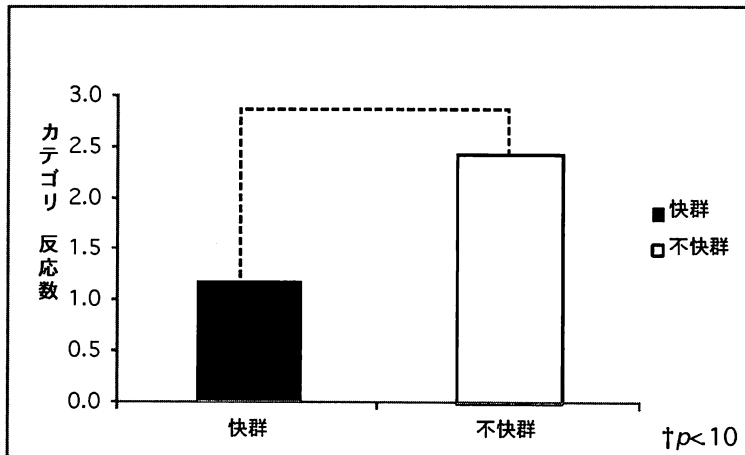


Table.11 情緒応答性快群および不快群の育児効力感得点平均値・標準偏差

| 育児効力感 | | 平均値 | 標準偏差 |
|----------------|-----|-------|------|
| 子どもへの積極的関わりの自信 | 快群 | 28.80 | 4.18 |
| | 不快群 | 27.78 | 5.19 |
| 子どもを安堵させる自信 | 快群 | 25.10 | 4.15 |
| | 不快群 | 25.11 | 3.52 |
| 子どもを自己統制させる自信 | 快群 | 13.80 | 2.10 |
| | 不快群 | 12.11 | 3.30 |
| 合計 | 快群 | 67.70 | 6.88 |
| | 不快群 | 65.00 | 9.30 |

Fig.2 情緒応答性快群および不快群における「その他」表情カテゴリーの反応数

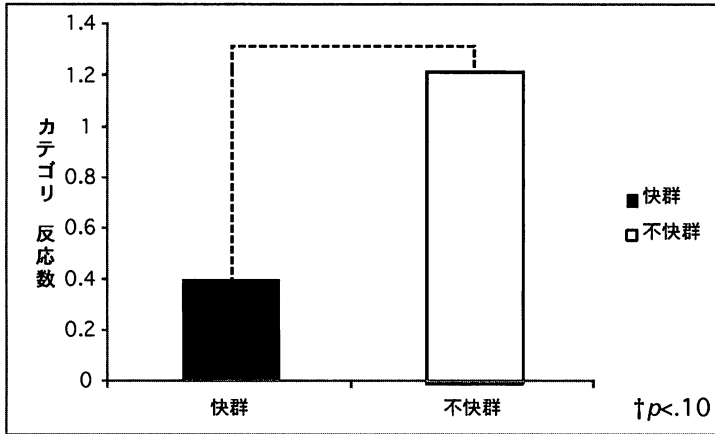
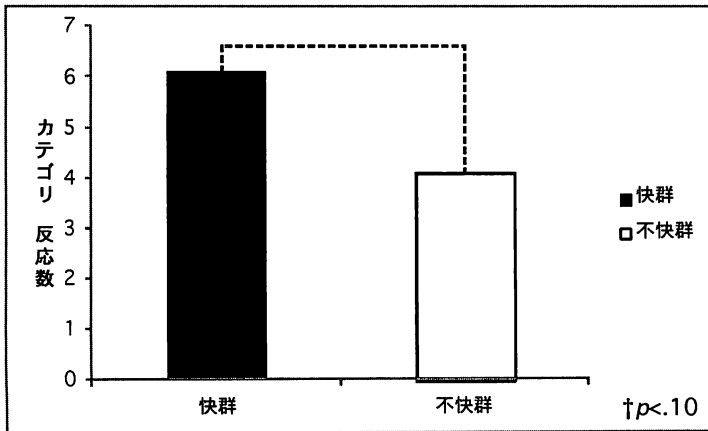


Fig.3 情緒応答性快群および不快群における「注意」表情カテゴリーの反応数



3. 「あいまいな写真」に対する快・不快感情への読み取りの強度と育児自己効力感の関連 - 高群・低群 - (分析2)

①. 「あいまいな写真」に対する情緒応答性得点による群分け

分析1では、母親が快・不快感情のどちらを多く

読み取っているのかという視点から分析を行った。そこで分析2では、快・不快感情という2軸ではなく、「快・不快のあいまいな写真」に対して、快あるいは不快に関わらず、あいまいな写真の表情に対する読み取りの強度という視点で群分けを行った。具体的には、「あいまいな写真」に対して情緒応

答性得点が平均値から1SD以上離れていた7名を、快あるいは不快に関わらず、あいまいな写真の表情に対して感情を強く読み取っている群とし、情緒応答性「高群」とした。同時に、情緒応答性得点が平均値から1SD以上離れていない15名を、あいまいな写真の表情を平均的に読み取っている群とし、情緒応答性高群と対照させるため、情緒応答性「低群」とする。情緒応答性高群の平均値は

47.29、標準偏差は7.43、得点最大値は57、最小値は39であった。情緒応答性低群の平均値は47.33、標準偏差は1.91、得点最大値は51、最小値は45であった (Table.12)。この結果から、情緒応答性高群では標準偏差が情緒応答性低群よりも幅があることが示された。このことから、情緒応答性高群は情緒応答性低群よりも表情の読み取りの幅が広く、豊かに表情を読み取っていると考えられる。

Table. 12. 情緒応答性高群および低群の情緒応答性得点

| | 平均値 | 最小値 | 最大値 | 標準偏差 |
|----|-------|-----|-----|------|
| 高群 | 47.29 | 39 | 57 | 7.43 |
| 低群 | 47.33 | 45 | 51 | 1.91 |

Table.13 情緒応答性高群および低群の育児効力感得点平均値・標準偏差

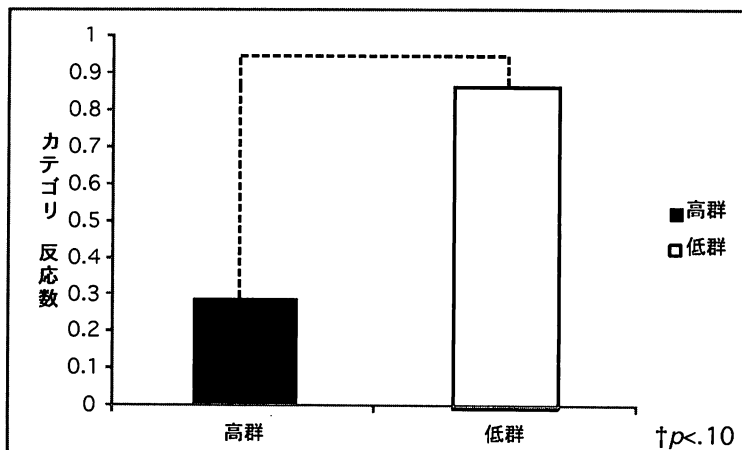
| 育児効力感 | | 平均値 | 標準偏差 |
|----------------|----|-------|------|
| 子どもへの積極的関わりの自信 | 高群 | 27.71 | 5.91 |
| | 低群 | 29.27 | 3.83 |
| 子どもを安堵させる自信 | 高群 | 24.57 | 3.95 |
| | 低群 | 25.40 | 3.44 |
| 子どもを自己統制させる自信 | 高群 | 11.29 | 1.89 |
| | 低群 | 14.20 | 2.70 |
| 合計 | 高群 | 63.57 | 9.66 |
| | 低群 | 68.87 | 6.39 |

②.情緒応答性高群・低群の表情カテゴリーについて

各群において、どの表情を読み取る傾向が高いかを明らかにするため、クラスカル・ウォリスの検定を行った。その結果、その他の項目で、群による表情読み取り数に違いがある傾向がみられ、情

緒応答性高群の方が情緒応答性低群よりも、「あいまいな表情」に対してその他の表情を読み取る傾向が高い ($p < .10$, Fig.4) ことが示唆された。つまり、「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親よりもその他の表情を読み取る傾向にあるといえる。

Fig.4 情緒応答性高群および低群と「その他」表情カテゴリー

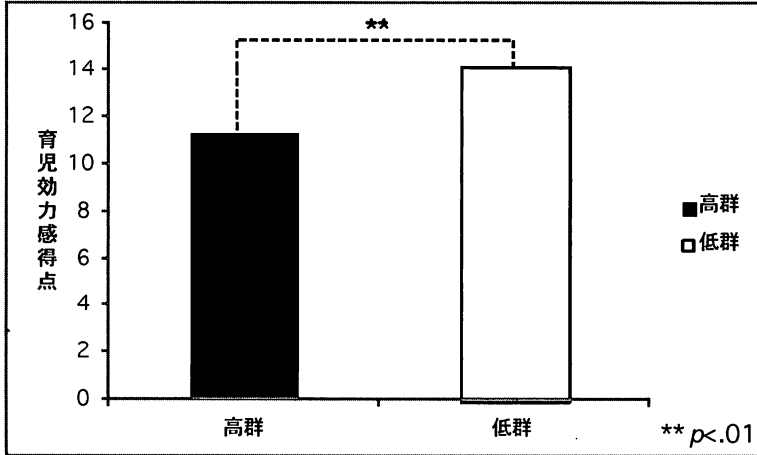


③. 情緒応答性高群・低群の育児効力感について

各群における育児効力感について、育児効力感全体および各因子得点の比較をt検定を用いて行ったところ、「子どもを自己統制させる自信」因子において、群による育児効力感得点の有意な差が

見られた($t(16)=2.12, p < .01, \text{Fig.5}$)。つまり、「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親より子どもを自己統制させる自信が低いと示された。

Fig.5 情緒応答性高群および低群における「子どもを自己統制させる自信」得点



考察

1. 情緒応答性と育児効力感との関連

本研究の結果から、「あいまいな写真」を快表情と捉えやすいか、不快表情と捉えやすいかということは育児効力感に影響を与えないことが示唆された。子育て支援の現場では、母親が語る育児の原動力に「子どもの笑顔」という言葉をよく耳にする。確かに、子どものあいまいな表情に対して、快感情を読み取る母親の方が不快感情を読み取る母親よりも育児の中で効力感を持ちやすいと一般的には考えられるであろう。しかし、本研究の結果からは、子どもの快感情への読み取りは、育児を行う上での自己効力感に関連は見られなかった。このことは、育児を行う上で、母親が効力感を感じるためには快・不快という2軸で語れるほど単純なものではないと考えることが出来る。

さらに、「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親より子どもを自己統制させる自信が低いと示された。自己統制因子の項目としては、「子どもに我慢させるべきことは我慢させられる」「子どもがどうしても言う事を聞かない時には、子どもの要求通りにしてしま

う(R)」等であった。この項目は、「しつけ」に該当する項目といえる。未成熟な子どもを育てるといいう子育ての過程には、「しつけ」は重要である。子どもの感情を強く読み取る母親ほど、その気持ちを断ち切ることが求められる「しつけ」を行うことは、母親の効力感の低下につながると推測される。小原 (2005) は、「あいまいな写真」に対して快感情を多く読み取るほど育児困難感が高いことを示したが、本研究の結果も同様の結果を示したと思われる。つまり、子どもの感情を強く読み取る程、子どもの気持ちを優先してしまい、「しつけ」としての関わり自体の困難感が増し、効力感が低下した可能性が考えられる。

一方、本研究の結果から、子どもの表情が「あいまいな写真」に対して、「思考」を読み取る母親は、「子どもを安堵させる自信」に関する育児効力感が高い傾向が示された。つまり「思考」を読み取った母親は、子どもの曖昧な表情から“何かを考えている”と捉えたことを意味する。Meins (1997) は、乳幼児の段階から子どもを既に「心」を持った存在と捉え、子どもの言動の背景に存在する「心」を豊かに帰属させて理解しようとする傾向を

Mind-Mindednessとし、母親がMind-Mindednessを持つことが、安定的な愛着関係を構築することにつながると述べている。本研究における「あいまいな写真」に対して、「思考」を読み取る母親は、Meins (1997) の示したMind-Mindedness傾向を有していたと考えることができる。つまり、子どもが思考する存在という態度を前提としており、心を有した存在として読み取りを行ったと考えられる。「子どもを安堵させる自信」因子は「子どもがぐずった時、あるいは言う事を聞かない時に、なだめている」「子どもが泣きだした時、私が関わることで泣きやむ」等の項目から構成されている。育児の中でも難しい関わりとされている“ぐずり”や“泣き”に対して、安堵させられる自信があるということは、注目すべき結果である。このことから、母親が子どもの様々な感情の機微に対して豊かな視点を持つことが、対応が難しい関わりに対して効力感をあげる可能性が示唆されたと考えられる。

これまでの研究において、Mind-Mindednessの高さが、母親の育児過程でどのような感情を生起させるのかというような母親自身への影響についての検討はほとんど見られない。これは、Mind-Mindednessの概念は、母親と子どもとの関係性が子どもの「心の理論」発達に何らかの影響を与える要因となっているという立場から出てきたということに起因する。これまで、母親がMind-Mindednessに基づいた働きかけを子どもに持続的に行うことは、子どもの実際の発達状況というより発達の最近接領域に対する働きかけになるとされており (Meins, 1997), 母親のMind-Mindednessの高さと子どもの発達との関連についての検討が多くなされている。篠原 (2011) は、母親のMind-Mindednessと子どもの発達に関する縦断的な検討を行った結果、Mind-Mindednessが高い母親の子どもは、4歳時点において感情理解に優れ、同時に一般語彙の理解も高いことを示した。このように母親がMind-Mindednessに基づいた働きかけを持続的に行うことは、子どもの発達を促すことが実証されている。本研究の結果から、今後母親のMind-Mindedness傾向の高さが母親の育児過程で生じる心理過程にどのような影響を示すのかについて検討することで、育児の原動力

が明らかになる可能性が示されたと言える。しかし本研究において「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親より子どもを自己統制させる自信が低いと示されたことは興味深い結果である。つまり、子どもの感情に対してより強い感情を読み取りを行うことで、子どもを統制することに効力感が持てないのである。母親が子どもの感情を豊かに読み取るMind-Mindednessの高さは、子どもの気持ちに寄り添う状況をつくりやすく、それが母親の関わりの難しさを生む可能性も否定できない。そのため、母親と子どもの母子相互交渉における母親の育児で生じる感情を検討するためには、育児効力感および育児困難という両側面から検討する必要があると考えられる。

2. 母親が子どもの感情に対する読み取りのあり方と表情カテゴリーとの関連性について

本研究の結果から、子どもの感情に不快な感情を多く読み取る母親は、快な感情を多く読み取る母親よりも「不満」、 「その他」の表情を読み取る傾向が高かった。また、子どもの感情に快の感情を多く読み取る母親は、不快な感情を多く読み取る母親よりも「注意」の表情を読み取る傾向が高かった。さらに、「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親よりも「その他」の表情を読み取る傾向にあるといえる。このことから、読み取りの視点の向け方や、感情の強度の受け取りのあり方によって、どのような感情を読み取りやすいかということに関連がある可能性が示唆された。Mind-Mindednessが、子どもの言動の背景に存在する「心」を豊かに帰属させて理解しようとする傾向であるならば、逆にMind-Mindednessが持てないことが、子どもの表情に対する読み取りの狭さがあると考えられる。つまり、母親がMind-Mindednessを十分に働かせていない状況にある場合は、偏った感情に視点が向きやすい可能性が推察される。実施の子育て支援の現場では、子どもの感情の読み取りに偏りがある母親に出会うことがある。そのような認知の偏りの要因を明らかにするためにも、快感情、不快感情といった2局的な視点あるいは強度という視点だけでなく、Mind-Mindednessといった子どもの感情面への読み取りの豊かさという多義的な視点から

検討する必要があると考えられる。

引用文献・参考文献

Dumka, L.E., Stoerzinger, H. D., Jackson, K. M., & Roosa, M. W. (1996) : Examination of the cross-cultural and cross-language equivalence of the Parenting Self-Agency Measure. *Family Relations*, 45, pp216-222

Emde, R. N., & Sorce, J. F. 小此木啓吾 (監修) (1988) : 乳幼児からの報酬 情動応答性と母親参照機能 乳幼児精神医学, pp 25-48, 岩崎学術出版社

Emde, R. N., Osofsky, J. D., & Butterfield, P.M (1993) : The IFEEL Pictures : A new instrument for inter-pretng emotions. Connecticut. International Universities Press, Inc.

平野直己・森さち子・井上果子・濱田康子・滝口俊子・深津千賀子・小此木啓吾 (1997) : 日本版 IFEEL Pictures 母親への試行結果からの特徴の検討 心理臨床学研究, 15, pp144-151

井上カーレン果子・濱田康子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾 (1990) : 乳児の写真から情緒を認知する能力の測定-Japanese I FEEL Picture Test 家族療法研究, 7, pp114-124

厚生労働省 (2011) : 子ども虐待による死亡事

例等の検証結果 (第7次報告概要) 及び児童虐待相談対応件数等 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200001jq1.html>

Meins, E. (1997) : Security of attachment and the social development of cognition. East Sussex, UK : Psychology Press

小原倫子 (2005) : 母親の情動共感性および情緒応答性と育児困難感との関連について 発達心理学研究, 16 (2) pp156-164

Teri, D. M., & Gelfand, D. M. (1991) : Behavioral competence among mothers of infants in the first year : The meditational role of maternal self-efficacy. *Child Development*, 62, pp918-929

田坂一子 (2003) : 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号 人間科学研究編, pp1-10

謝辞

本研究の実施にあたり、快くご協力頂きましたお母様方、研究の意図に賛同して頂き、場所を提供して頂きました子育て支援センターの館長を初めスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。また、本論文作成に際して、調査の実施等で協力して頂きました琉球大学の平田和歌子さん、上原淳子さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。